

▶ 解放以前の封建的な結婚事情

1949年に新中国が誕生しましたが、それ以前の結婚の多くは、双方の両親が本人たちの意思に関係なく決めていました。古い中国の封建的な時代の結婚はずっとそのようなものだったのです。ここでは、中国の著名な文化人二人の例を挙げて、このような結婚事情を見てみましょう。その一人は郭沫若です。

郭沫若は日本でも中国の代表的な知識人として有名です。1892年に生まれた彼は四川省の出身、地主の家庭で生まれ伝統的な教育を受けましたが、辛亥革命の空気に触れて学生運動に積極的に関わりました。そして1912年、21歳の時、両親が決めた女性と結婚しました。しかし結婚式を挙げた5日後には家を出て、学校の寄宿舎に戻り、両親に諭されても彼女のところに戻ることはありませんでした。後年に書いた彼の自伝によれば、彼女は纏足をしていたようです。彼は翌1913年、日本に留学し九州大学医学部を卒業し、日本女性と結婚しました。

もう一人は、文豪・魯迅です。小説『狂人日記』『阿Q正伝』などを書いた魯迅は1881年生まれ、浙江省紹興の出身です。清朝末期の1902年、公費留学生として日本に渡り、1904年には仙台医学専門学校、現在の東北大学医学部に入学します。

1906年、微生物学の授業の合間に放映された幻灯の中に、中国人が日本の軍人に首を切られている写真がありました。多くの中国人が黙って取り巻いている姿を見て大きなショックを受けました。中国人たちが切られている場面を無表情に見ているのです。それを見て魯迅は、現在の中国にとっては医学よりも精神の覚醒が必要だ、人々の覚

醒には文学が必要なのだ、と医学から文学に転向しました。

その夏、魯迅は実家から、母親が病気であるから帰るようにという手紙を受け取りました。それは、母が魯迅を結婚させるために呼び戻すためでした。相手の女性は、魯迅よりも三歳上、文字も読めず、また纏足をしていた女性です。朱安というその女性とは、魯迅は生涯、夫婦として生活することはありませんでした。

そして1928年、魯迅は許広平という女性と結婚しました。許は広東省の生まれ、北京師範大学の学生時代、保守的な校長の排斥運動でリーダーとなって活動していた時代に、同大学で非常勤講師をしていた魯迅と知り合います。魯迅は学生たちを支援していました。許は、新中国になった後は、全人代常務委員などになって活躍します。

一方的に“結婚”させられた劉仁

結婚は家のためと考えられた封建的な時代です。劉仁も家に縛られ、12歳の時、親によって一方的に結婚させられました。しかし劉仁は、家からおおよそ120キロも離れた営口の水産専門学校に入学して寮に入ります。学費や生活費などは今までのように親が負担していました。嫁の楊春揮を養っていたのも劉家でした。

劉仁の家は、遼寧省本溪から南におよそ20キロ、橋頭街というところでは、劉仁の父、劉振邦は郵便局長を務める一方、「徳元堂」という薬局を営んでおり、更に酒や煙草、お茶、そして後には、精米、製粉加工所を営むなど、なかなかのやり手の実業家でした。祖父の代から受け継いだ事業を伸ばし、橋頭街では屈指の名士でもあったようです。

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」
第十一回 エスエペランティスト長谷川テルの人生④

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓（おおるい よしひろ）

劉振邦には、男三人、女二人の子どもがあり、劉仁は長男、弟が劉介庸、そして三男が劉維箴と言い、その三男が家業を継ぎました。次男の介庸も兄を追って日本に留学しました。その介庸が連れてきた兄・劉仁の妻・楊春揮に会ったテルの気持ちはどのようなものだったのでしょうか。

木田日登美の「^{ほくだひとみ}〈覚え書〉長谷川テルと劉仁の恋愛と結婚」(『長谷川テル日中戦争下で反戦放送した日本女性』長谷川テル編集委員会編所収)に依れば、劉仁はかつて、弟の介庸には「楊春揮と子どものことは決してテルには話すな」と口止めしていたようです。以下の事実も木田の書かれたものに依ります。

実は30年以上も経ってから楊春揮は、劉仁が17歳の頃、楊春揮との間に事実上の関係が発生した、と語っています。

劉仁は、このような事実をできるだけテルに話さなければいけないだろうと考えていたようです。日中戦争下の中国での劉仁とテルの厳しい生活は、知人たちからも離縁した方がいいのではないかと言われたこともあったようですが劉仁はテルを愛していました。それ故にまた、かつて親が一方的に決めたとはいえ、結婚していたという事実をテルに言うことはできませんでした。

▶ 劉仁と楊春揮との12年ぶりの再会

1946年4月、劉仁は楊春揮と12年ぶりに再会します。その時、劉仁のそばには二人の小さい子どもがいます。またそこには彼女より若い女性、テルがいました。

後年、劉仁とテルの間に生まれた女の子は、その後成長していろいろな経緯を経て、日本で長谷川暁子として日中友好活動に携わりますが、彼女の記憶に依れば、楊春揮は暁子のオムツを代えたりして、よく面倒を見てくれたようです。

この時、楊春揮は劉仁とテルの所に3日間泊まったようです。木田は、2006年4月本溪で、劉仁の姪・劉艶月に、楊春揮が劉仁とテルに会った時、

彼女はテルに「私のことは心配しなくていい、大丈夫、あんたは佳木斯(ジャムス)に行きなさい」と言って一人で橋頭に帰って行ったと話しています。

楊春揮もやるせない気持ちだったでしょう。テルもまた辛かったでしょう。二人の女性を前にした劉仁の心はどのようなものだったのでしょうか。

1946年11月、劉仁とテルは再び、佳木斯に向かいました。東北人民政府副主席となった高崇民の夫人と二人の子ども、劉仁とテル、そして二人の子ども、劉星と劉曉嵐(後に長谷川暁子と改名)、そして劉仁の弟・介庸です。すでに東北地方(旧満洲)は国共内戦を経て、中国共産党の支配地区になっておりました。

1947年1月7日、東北行政委員会第13回会議は「緑川英子と劉仁を東北社会調査研究所研究員とする」と決定しました。緑川英子とはテルの中国名です。この頃、テルのお腹には3人目の子どもが宿っていましたが、テルは流産する道を選びました。しかし流産の手術は失敗でした。当時の不衛生な手術器具から感染症になり、テルは亡くなりました。なぜ流産の道を選んだのか。劉仁が結婚していたことを知って劉仁を嫌いになったからではないか、と推測する人もいます。しかし、テルの健康問題が大きかったのではないか、というのが多くの研究者たちの結論のようです。

住んでいた重慶の気候の悪さ、また重慶には栄養不足から結核に感染する人々が非常に多かったようです。ともあれ、テルは34歳の若さで亡くなったのです。後を追うように、3か月後、身体が悪かった劉仁も黄泉の国に旅立ちました。

長谷川テルは、中国での筆名、緑川英子という名前、Verda Majo(ヴェルダ・マーヨ、緑の五月)というエスペラント名という3つの名前をもって平和のために闘い、今、劉仁とともに佳木斯の烈士陵园に「国際主義戦士」としてに葬られています。

(続く)